

小松市における介護保険事業計画の見直し ～ほこりを被っていたデータの活用～

小松市長寿介護課
保健師 角地 孝洋

小松市の概要

小松市は、石川県西南部に広がる豊かな加賀平野の中央に位置し、産業都市として発展し、南加賀の中核を担っています。東には霊峰白山がそびえ、その裾野には緑の丘陵地、そして田園、平野が広がっています。それを縫うように梯川が流れ、安宅の海に注いでいます。

自然・産業・文化



人口・世帯数（令和7年4月1日現在）

- 人口 105,067人（男 51,734人 女 53,333人）
- 世帯数 45,977世帯
- 一世帯あたり人数 2.3人

65歳以上人口 30,527人

高齢化率 29.1%

要介護認定率 16.9%



小松市ゆるキャラカブッキー



自己紹介

- ・ 1979年 金沢市生まれ
- ・ 1998年 千葉大学看護学部入学
- ・ 2002年 千葉大学看護学部卒業・小松市役所入庁（いきいき健康課）
- ・ 2008年 地域包括支援センターに異動
- ・ 2011年 東日本大震災発生（震災支援で役に立たず悩む）
- ・ 2012年 長寿介護課に異動・石川県立看護大学大学院入学
- ・ 2015年 石川県立看護大学大学院卒業
- ・ 2024年 地域交通政策室に兼務辞令
- ・ 現在に至る

気づけば介護に17年

計画は第5期計画から眺めていました



当初の介護保険事業計画の課題

課題 1 事業を知らない一部職員で作成

認定担当	認定しかもっていない情報もある
介護保険担当 (給付・指定・徴収)	一人の事務職員がほぼ一人で計画を作成していた時代も
地域包括ケア推進担当	事業内容やアウトプットの記載だけ依頼されて、とりあえず埋める

課題 2 データと事業の資料集と化しており、事業の創出や評価がされていない

基礎資料（人口等）	<ul style="list-style-type: none">・ 資料としては使える・ その値が何を意味するのか分析がない
既存事業	<ul style="list-style-type: none">・ やっている事業が中心・ 計画期間中にとりあえずアウトプットを増やす
各種調査データ	<ul style="list-style-type: none">・ 業者が調査を実施・ 分析というより、基礎統計の説明中心

データは放置されたまま活用されず、地域の実情に合った介護予防事業が創出されるような状況ではなかった

計画の策定体制・全体構成を見直し

見直し1 課全体（事務職・専門職）で作る体制を構築

- 計画策定担当に、地域包括ケア推進担当から 1 名保健師を担当替え
- 課全体で定期的に「計画策定のための会議」を実施
- 「数だけ更新する」のではなく、「今後どうしていくべきか」が考えるための計画として、刷新する

ビジョン	大目標	○語尾は「～できている」 ○「地域が目指す望ましい姿」 ○Not 達成手段		
	中目標	○語尾は「～できている」 ○「地域が目指す望ましい姿」 ○Not 達成手段	参照指標	中目標の進捗を測る指標
現状分析	検討事項	○語尾は「～は何か？」 ○中目標（参照指標）を達成するために「何が必要か？」という問い		
	実態把握	検討事項の問いに答えるために必要な「把握すべき地域の実態」※各種調査		
施策化	サービス提供体制の構築方針	実態把握を受けた方針（具体的事業ではない）		
	重点施策	具体的事業。数値目標あり。要進捗管理。		
	その他の施策	具体的事業。数値目標なし。		

見直し2 分析の起点となる「目指す姿」をしっかりと設定

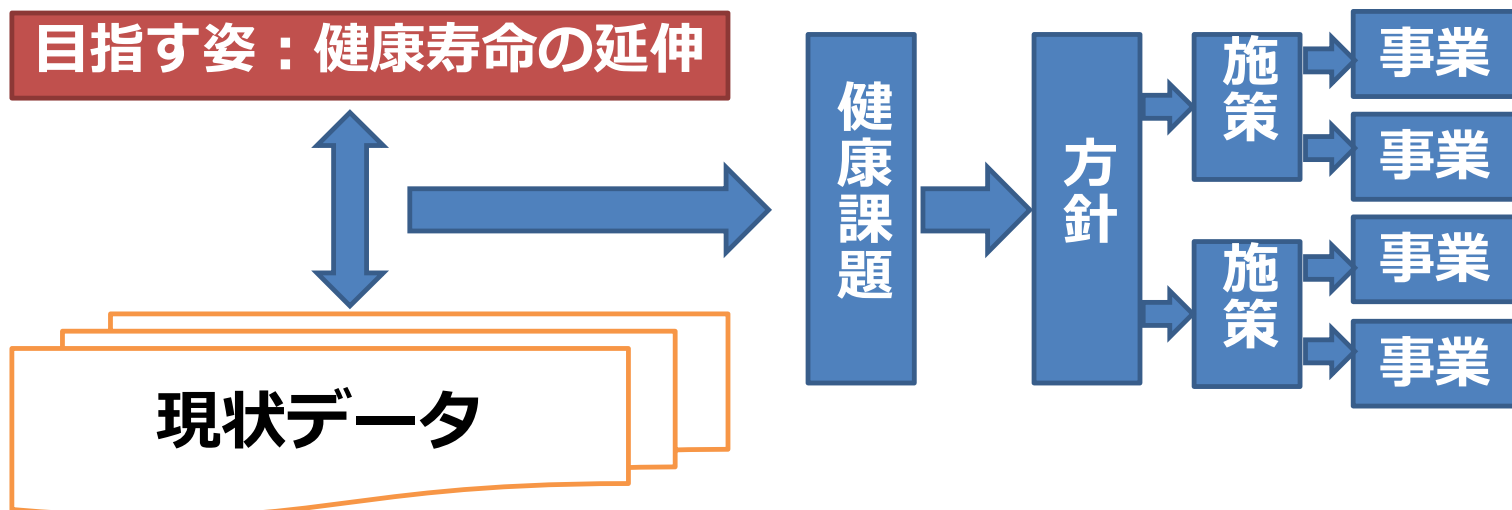
- 「目指す姿」を多職種協議体（地域ケア会議）で「大目標」として設定
- 「大目標」のフレーズから、「中目標」を設定

見直し3 現状分析-課題抽出をデータを活用しておこなう

膨大なデータをどうするか？

「介護の現状分析」を保健師がする「地域診断」っぽく考えてみた

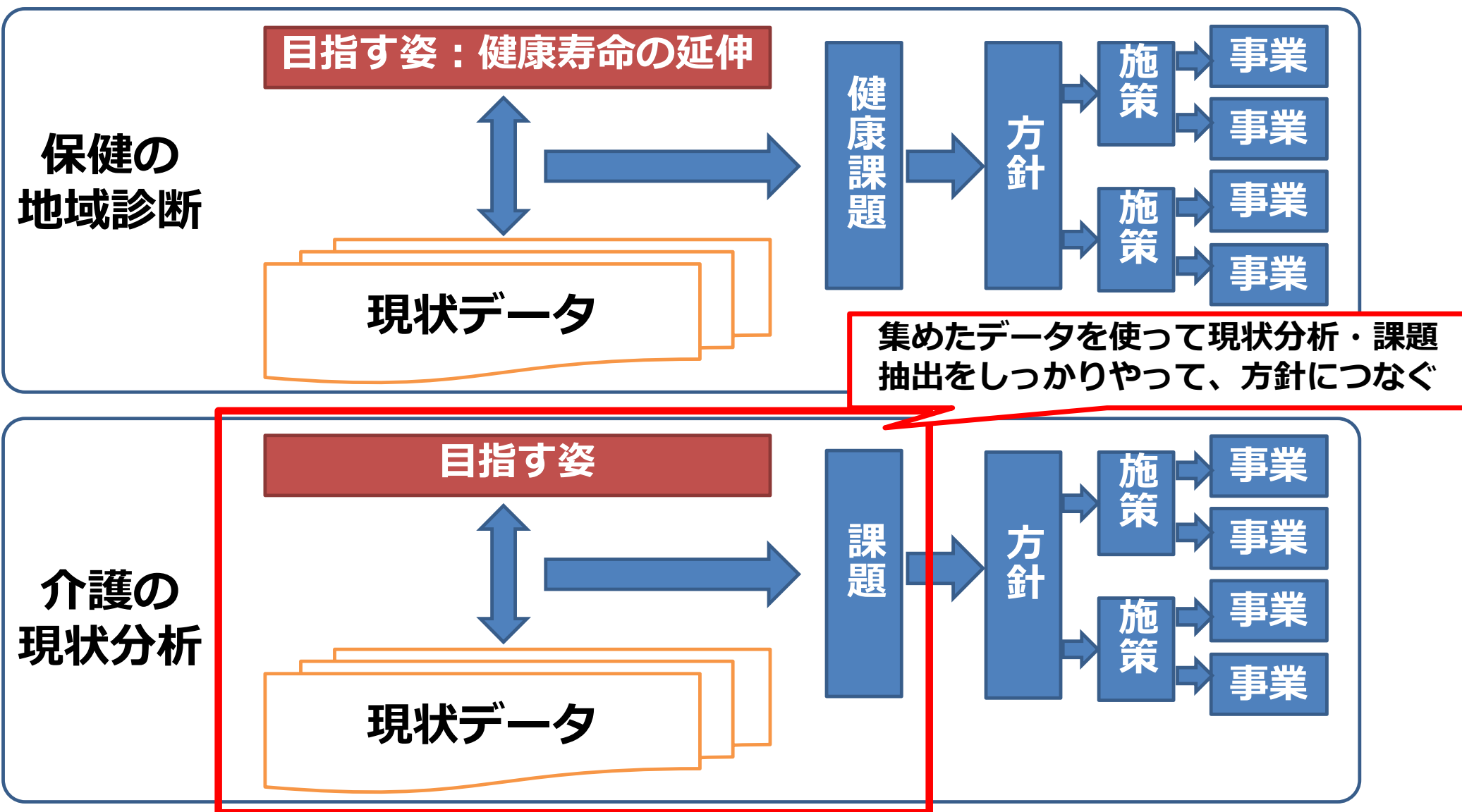
保健の 地域診断



介護の 現状分析



「介護の現状分析」を保健師がする「地域診断」っぽく考えてみた



目指す姿の設定

大目標

どのような状態になっても、地域で支え合い、住み慣れた地域で、できる限り自立しながら安心して暮らし続けることができる

中目標

要介護にならないよう、介護予防に取り組むとともに、支援が必要な時は、必要な支援を受け、自立した生活を継続できている

中目標

変化する社会に対応しながら、安心した生活を支える担い手として活躍できる地域の人材（専門職・住民）が充足している

中目標

状態に応じた支援が地域や専門職の力により提供され、安心して生活ができている

中目標

当事者・家族・地域が安心した生活を続けることができる

現状分析に使うデータの用意

- 構成の全見直しだったので、とりあえず情報はなるべく多く
- 調査だけではなく、日々蓄積されている情報も活用
- 質的情報も重視（ないとデータの解釈が難しい）
- 量的情報はなるべく経年・他市比較できるように（ないとデータの解釈が難しい）

【量的情報】

- 介護予防・日常生活圏域二エーズ調査
- 在宅介護実態調査
- 介護サービス供給量に関する調査
- 介護サービス事業者調査
- 施設入居待機者に係る実態調査
- 在宅生活改善調査
- 居所変更実態調査
- 介護人材実態調査
- 要介護認定原因疾病調査
- 各種事業実績
- 見える化システム・KDBシステム

+

【質的情報】

- 各種協議体の意見
- 地域包括支援センターの意見
- 地域の専門職の意見
- 地域サロンの声

漠然と眺めているだけでは課題はでてこない

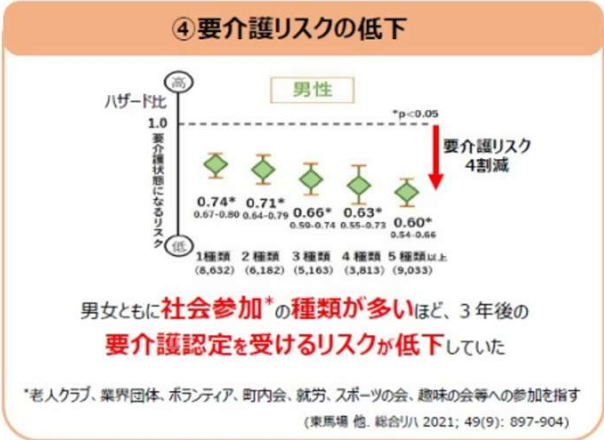
「目指す姿」を意識して考えることに

純粋な疑問・現場の肌感覚からきっかけを作る

中目標

要介護にならないよう、介護予防に取り組むとともに、支援が必要な時は、必要な支援を受け、自立した生活を継続できている

●着目したキーワードから目指す姿に至るための「問い」や「仮説」を立てる



●日本老年学的評価研究（JGES）では、通いの場への参加が介護予防につながると報告されている

じゃあ、うちの地域サロンの状況は？

●実際のデータ（量・質）を見してみる

(事業実績)
サロン設置数

	H30	R2	R5
いきいきサロン	189	189	182
ゆったりサロン	18	27	25

減っている地域サロンをもっと増やさないといけない・・・？

そもそもどうして減っているの？

そもそも減って困っているの？

「問いや仮説」と「データを見る」ことを繰り返し、課題を掘り下げる

中目標

要介護にならないよう、介護予防に取り組むとともに、支援が必要な時は、必要な支援を受け、自立した生活を継続できている

● 問いの結果を掘り下げる → データを探す

そもそもどうして減っているの？

(地域の声)
世話人の声

- 高齢化が進んで体操に出来ない人が増加
- 活動がマンネリ化して、困っている
- 自分も高齢化してきて辛い

そもそも減って困っているの？

(事業実績)
参加割合

	市	国KPI
通いの場に参加している高齢者	16%	8%

(ニーズ調査)
活動への参加

	R2	R4
何かしらの活動に参加している人	59.6%	66.3%

この繰り返し

来れなくなった人の支援が必要かも

サロンの数を増やすどころか持続可能性に問題ありかも

地域サロンは充実しているのかも（困ってないかも）

地域のサロン以外を選択する高齢者が増えているのかも

課題を掘り下げた結果

中目標

要介護にならないよう、介護予防に取り組むとともに、支援が必要な時は、必要な支援を受け、自立した生活を継続できている

●掘り下げ前

	目標値		
	H30	H30	H31
いきいきサロン	193	197	200

地域サロンという「手段」をどうするかという視点→「増やせばよい」

●掘り下げ後

- いきいきサロンが増えればよい →多様な活動のサロンを増やすことが必要
- ▶民間事業者の力を活用（いろどりサロン）
- いきいきサロンは定着・安泰 →ボランティア・参加者の高齢化への対応
- ▶地域包括支援センターへのリハ職配置→サロン支援事業
 - ▶民間事業者の力を活用（こまついきいき応援団）
- 参加者が増えていけばよい →参加できなくなった人の支援が大切
- ▶短期集中予防サービスの充実

データがほこりまみれにならないように

そもそも「量的情報」のみから「課題抽出」をするのは難しい

評価には使える

【量的情報】

- 介護予防・日常生活圏域二エズ調査
- 在宅介護実態調査
- 介護サービス供給量に関する調査
- 介護サービス事業者調査
- 施設入居待機者に係る実態調査
- 在宅生活改善調査
- 居所変更実態調査
- 介護人材実態調査
- 要介護認定原因疾病調査
- 各種事業実績
- 見える化システム・KDBシステム

計画策定のタイミング的に、「データ」が先に集まってしまいがち

●「量的情報」から分かるのは状況だけ

→課題として認識するためには、少なくとも比較や対比ができるものが必要

目指す姿

経年比較

地域比較

→「量的情報」の結果を意味づけするためには、「質的な情報」が大切。

特に地域の声は大切

●「問い」・「仮説」からデータを見る方が簡単

データ

難しい

地域課題

データ

問い 仮説

地域課題

計画を全面見直しした後、次期計画策定に向けての工夫
データは「集める」ためのもの（目的）ではなく、目的があって「集める」もの（手段）
「問い」や「仮説」は日々整理し、計画策定時に調査できるようにしておくとい

小松市第9期計画：「多様性」が視点に追加

多様性のある地域サロン

そもそも高齢者はどんな活動をしたいの？

既存調査には
ない項目

（デイが安いので）自己負担はどれくらいまでならできるの？

「問い」や「仮説」は、相談業務や地域との会合、
各種協議体等、地域に出ると沢山落ちている

【ニーズ調査独自項目】
●年齢を重ねても、参加
したいと思うものは？

【ニーズ調査独自項目】
●いくらまでなら利用しよう
と思いますか？

ご清聴ありがとうございました



小松市ゆるキャラカブッキー